

緩和ケア・コミュニケーションのエビデンス ああいうとこういうはなぜ違うのか？

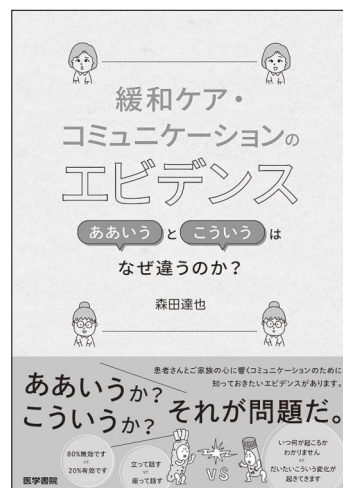
森田達也【著】

森 雅紀【執筆協力】

評者

頭木弘樹

文学紹介者



病院に行くとき、録音機を持って行こうかと迷う。説明を覚えきれないからだ。いい加減に聞いているわけではない。その逆で、1つ1つの医師の発言に集中し、ちゃんと理解しようとしている。それだけにそしゃくに時間がかかり、次々に繰り出される言葉を飲み込みきれなくなる。

しかし、いまだに持って行ったことはない。医師のショッキングな発言が録音されると嫌だからだ。消せばよいだけなのだが、録音されたらと思うだけで、もう胸が苦しくなり、やめてしまう。

それぐらい、医師や看護師の言葉は患者に突き刺さる。医療者が一度発しただけの言葉を、患者は何百回も反すうすることがある。病院の待合室で話していると、「20年前のあの医師の言葉がいまだに忘れられない」などという人がたくさんいる。

もちろん、患者側が過敏すぎる面もある。医療者は大勢の患者を相手にしているわけで、全員に気を遣ってはられない。治療さえちゃんとやってくれば、言葉とがめはなるべくしたくないと思っていた。

だからこの本も、読む前は、「患

者の気持ちをわかってあげましよう」と書いたところで、現実には難しいのでは？」と思っていた。ところが、そういう本ではなかった。「相手をわかろうとすることがどうということか生まれついて『わからない』人に自然なコミュニケーションを求めるのは酷」とまで著者は断じている。医療者にだって、当然そういう人はいる。「人は共感性も態度もなかなか変えられない。それならば、せめて、ああいう・こういうを工夫する」という、実に現実的な本で、目からウロコだった。

実際、この本に書かれている工夫は、患者の側から見て、「ぜひそうしてほしい！」と思うことばかりだ。例えば副作用の説明で「5パーセントに吐き気が起こる」と「95パーセントで吐き気は起こらない」では、確かに言われる側としては大違いだ。しかも、そのような言い方をすることで、「副作用の発生率を減らすことができる」ということに驚いた。

客に愛想がよくてまずい鮎屋より、無愛想でもうまい鮎屋のほうがよい。医療者に関しても、そういうふうに思ってしまうところがある。しかし、この本を読むと、

患者への言い方を気をつけることは、治療ともなり得るのだ。これも目からウロコだった。

患者の「言葉と意図は違うことがある」と著者が認識していることにも深く感動した。それが原因の医師と患者の行き違いは、入院中に6人部屋でたくさん目にした。それがどうということかは、この本に出てくる事例を読んでみてほしい。事例が豊富なもの、この本のありがたいところだ。

というわけで、読む前とは完全に考えが変わり、いまはすべての医療者にこの本を読んでほしいと思っている。自分の主治医にも。

また、ここに書いてあることは、医療者と患者だけでなく、さまざまなところに応用できると思った。私自身、仕事やプライベートでも、ああいう・こういうを工夫してみるつもりだ。

A5判・168頁

2021年6月

定価：2,200円

(本体2,000円+税)

[ISBN978-4-260-04586-5]

医学書院刊